

Le Lys Blanc

✧学長ごあいさつ✧

“Who is Shirayuri Univ. ?”



白百合女子大学

学長 猪狩 友一

本学では様々な講演会やイベントが催されています。去る5月28日には、ライフ・リテラシー教育センター主催で、本学非常勤講師の広瀬彩先生による、「演劇の手法で学ぶ WHO AM I ?」と題したワークショップが行われました。広瀬先生は、ロンドンの王立演劇学校でシェイクスピア演技コースを修了され、現在は俳優としてご活躍の他、株式会社トビラボ代表として、演劇的手法を用いた教育・研修を展開されています。

広瀬先生のご指示で、私たち参加者は会場のクララホールで様々なエクササイズを行いました。6人でグループを作り、そのうち1人が解答役となり、その人が何者であるかについて(解答役には知らされていない)、他の5人がお芝居を即興で演じ、解答役が見事に答えられるかどうかを競うというワークも行いました。短い時間ではありましたが、私などは、硬直したアタマとカラダを鍛え直してもらった感じがしました。広瀬先生、そしてライフ・リテラシー教育センターの皆さま、ありがとうございました。

ところで、話は変わりますが、本学は昨年より三鷹ネットワーク大学に正会員として参加していますが、その会合で、国立天文台長の土居守先生から面白いお話を聞きました。私たちの住む太陽系を含む銀河系宇宙の姿は、実はよく判っていないということです。

大きな理由は、私たち(銀河系)を外から観測できないから、なのだそうです。銀河系の姿を描いたイラストなどは、あくまで想像図にすぎないとのこと。

広瀬先生のワークショップの題名には「WHO AM I ?」とありました。私たちも実は、自分自身のことをよく判っていないのかもしれませんが、大学はどうでしょうか? “Who is Shirayuri Univ. ?”と問われて、どのように答えられるでしょう?

6月5日には、仙台白百合女子大学で日本カトリック大学・短期大学連盟の総会がありました。その折に、仙台白百合のSr.加藤美紀学長は「今なぜカトリック大学なのか」と題した講演をなさいました。加藤先生によれば、カトリック教育の真髄は学生の魂への配慮(Spiritual care)であるとのこと。確かにそれは重要だと考えさせられるご講演でした。

「WHO AM I ?」のワークショップでは、本学の教職員+学生の皆さんの企画力やチームワークの高さに感動しました(「エンゲキ係数」が高いです)。カトリック校であることも含め、本学の個性をどのように発揮していくか、これは今後ますます重要になってくると思います。“Who is Shirayuri Univ. ?”という問いに明瞭に答えられるよう、皆さんと一緒に考えていきたいと思ひます。

2026年
7月21日 発行

Contents

“Who is Shirayuri Univ. ?” 学長 猪狩友一	1
トピックス	2
学生の活動・様子	3
新任教員ごあいさつ	4
サバティカル報告	5~6
企画・主催	7
キャリア・その他	8



文化と人の未来をひらく学びへ。学部・学科を再編 — 2028 年 4 月「MIRAI 文化学部」「人間発達科学部」(いずれも仮称) の設置を構想

社会の変化や多様化する学びのニーズに応えるため、2028 年 4 月を目指して学部・学科の再編を構想しています。文学部は、文化の理解に加えて創作や実践、AI を活用した発信などを通して文化を多角的に学ぶ「MIRAI 文化学部」(仮称)へ改組する予定です。また、人間総合学部は、人の心や身体、社会や環境などを総合的に捉える「人間発達科学部」(仮称)へ改組し、生涯発達の視点から人や地域の未来を支える人材の育成をめざします。本構想は、これまで本学が培ってきた「人を深く理解する学び」を基盤に、新しい時代にふさわしい教育のかたちを提示するものです。

現在、文部科学省への設置届出に向けて準備を進めており、その内容につきましては、大学ホームページ等で順次公開してまいります。

※なお、設置計画の内容は予定であり、名称・内容等に変更が生じる可能性があります。

▼詳細はこちら



学部再編と新学科の設置に向けた構想について
(2028 年 4 月開設予定)

桜咲くキャンパスで、新たな学びの一步を踏み出す【入学式】



4 月 1 日(水)、本学講堂において 2026 年度入学式が挙行されました。当日はときおり雨の気配を感じる空模様となりましたが、キャンパスには桜が咲き、新入生の門出をやさしく彩りました。

式では、学長より歓迎の言葉が贈られ、正解のない問いに向き合うことの大切さとともに、本学の教育目標である《真・善・美》が、これからの AI 時代において一層重要な意味を持つことが語られました。

式の前後には、ご家族とともに記念撮影を行う姿も見られ、新入生にとって心に残る一日となったのではないかと思います。また、当日は在学生によるクラブオリエンテーションも実施され、課外活動への関心を高める機会となりました。

本学の穏やかなキャンパスでの学びと出会いが、一人ひとりのこれからの成長へとつながっていくことを願っています。



「コバルト文庫創刊 50 周年記念シンポジウム」が開催されました

集英社コバルト文庫の創刊 50 周年を記念するイベントとして、5 月 30 日(土)本学キャンパスにて「コバルト文庫創刊 50 周年記念シンポジウム」が開催されました。半世紀にわたり多くの読者に物語との出会いを提供し、日本の少女カルチャーや若者の読書文化の形成に大きな役割を果たしてきたコバルト文庫。三部構成で行われた本シンポジウムでは、第一部では人気作家の桑原水菜さんと今野緒雪さん、書評家の嵯峨景子さんによるトークショーが行われました。第二部からは本学人間総合学部児童文化学科のトミヤマユキコ准教授と山中智省准教授が登壇。研究者の視点からその歩みを振り返るとともに、

作品が読者にもたらした影響や、物語をめぐる文化の広がりについて考察。第三部では登壇者全員によるクロストークが行われ、会場に訪れた多くのお客様とともに、大いに盛り上がりしました。

なお、本学は、今年 2 月、SF 研究家であった故・星敬氏の旧蔵書のうち、コバルト文庫が刊行した少女小説の作品群を対象に寄贈の受け入れを発表しました。

コバルト文庫は、現代の少女小説の発展に寄与した作家と作品を世に送り出し、今なお多くのファンを持つ少女小説レーベルです。少女小説は、時代ごとの女性像やジェンダー観、さらには多様なジャンル、メディア、文化の要素が反映された存在であるため、児童文学・文化研究にとっては重要な研究資料の一つになります。



学生の活動・様子

【報告】2025 年度「学生活動に関する顕彰制度」の表彰式が執り行われました



1 月 15 日(木)、2025 年度学生活動に関する顕彰制度の表彰式が行われました。本制度は本学の学生または本学学生で組織する団体が、その活動分野において他の模範となる成績を収め、または貢献をした場合、それが学生や団体ならびに本学の栄誉となるものについて顕彰する制度で、学長賞と学生活動奨励賞の二つがあります。

2025 年度は学生・就職委員会内での応募書類の審査、対象者へのヒアリングなどを経て、以下 3 件の学生活動奨励賞授与が決定いたしました。

※受賞時の学年で掲載しています。



国語国文学科 4 年 平塚 みのり

IT パスポート及び情報セキュリティマネジメント等の国家資格取得と関連領域への継続的学習への取り組み

大学の履修パスに沿って IT パスポート及び情報セキュリティマネジメント等の国家資格を取得し、卒業年次前での合格という学内初の快挙を達成。また、3 年間 SA (学生アシスタント) を務めて情報科目の授業を支援し、後輩の相談に乗るなど良い影響を与え、身近な目標となり、学生生活を支えた。この経験はオープンキャンパスや広報活動の運営でも発揮された。学びを継続する姿勢、挑戦する意欲は卒業後の就職先においても実務に直結するスキルとして期待される。

発達心理学科 1 年 但馬 芽吹

早産児・疾患児とその家族への支援及び多方面にわたる啓発活動への取り組み

自身が早産児として生まれた経験から、当事者や家族への支援に尽力。高校時代から代表を務めるリトルベビーサークル「cheerful」では早産児やご家族からのメッセージへの対応や、SNS 等で情報発信を行うほか、教育支援団体「study room」では闘病中の生徒らへ学習・心理的サポートを行うなど多岐にわたり活動する。その真摯な取り組みは社会的な注目を集め、NHK の首都圏ネットワークでの放送や、朝日新聞やヤフーニュースなどの大手メディアでも広く紹介された。

チアリーディング部 RECKLESS

代表 フランス語フランス語文学科 3 年 井川 ららは

United Association Japan 主催大会 show cheer 部門 novice クラス 2 位受賞と、学内外イベントでの協力的取り組み

部員 4 名からスタートであったが、学内行事などでの演技協力を通じて未経験者を含む 8 名へ拡大。United Association Japan 主催大会の同部門で 2 位となる快挙を成し遂げた。大会への参加、演技プランなどは全員で話し合い、技の高度さではなく自分たちらしい「チアスピリット」の表現を追求し、対話を重ねて強みを磨いた。オープンキャンパスへの協力や、地域イベント「おらほ仙川」への参加など、持ち前の明るさと行動力で学内外の活性化にも大きく貢献。

SDGs「誰ひとり取り残さない」コンテスト小論文部門で特別賞を受賞

2025 年度第 6 回 SDGs「誰ひとり取り残さない」コンテスト〔主催:野毛坂グローバル／後援:国際協力機構(JICA)〕小論文部門で、人間総合学部発達心理学科 1 年(受賞時) 但馬芽吹さんが、特別賞を受賞しました。

エーザイ特別賞《小論文部門》 人間総合学部発達心理学科 1 年 但馬 芽吹 「闘病とわたし 一傷みにより抱けた夢」

このコンテストは、若者が SDGs の理念に基づき、自らの視点で社会課題を考え、その声を社会に発信することを目的として実施されているものです。

(但馬さんのコメント)

この度、「SDGs『誰ひとり取り残さない』小論文・イラストコンテスト 2025」において、エーザイ特別賞を受賞いたしました。今回の受賞は、この 1 年間で感じたことや、白百合での学びを通してより明確になった夢・将来像について評価していただいた結果であると感じており、大変光栄に思います。これを励みに、これからも恵まれた学習環境に感謝しながら、目標の実現に向けて努力を重ねてまいります。

チームビルディング研修開催 ～学生活動の活性化を目指して～



者からは「存在承認の考え方を大切にしたい」「日常生活やより良い人間関係づくりに活かしたい」といった前向きな声が寄せられ、組織運営や今後の社会生活に生きる貴重な機会となりました。なお、全 2 回の研修を修了した 39 名の学生には、その証として修了証が授与されました。今回の学びをきっかけに、今後の学生活動がさらに活性化することが期待されます。

本学初の試みとして、日本チームビルディング協会から講師を招き「チームビルディング研修」を開催。学生会執行部やクラブ連合、白百合祭実行委員会などの 2026 年度新役員、公認クラブの中心メンバー、希望するピアサポート団体の学生などを対象に行われました。プログラムは全 2 回で、2025 年 12 月から約 1 カ月間の実践期間を挟み、2026 年 1 月に第 2 回を実施。【アクティビティ】と【座学】を交え、楽しみながらコミュニケーションスキルや他者理解の手法を学びました。参加



ライフ・リテラシー教育センター 教授 佐々木 康浩

新しい風を、学びと地域に

この春より、ライフ・リテラシー教育センターに着任いたしました佐々木康浩と申します。専門は経営情報学で、これまで企業や大学の現場で、人材育成、組織づくり、業務改善、地域連携、デジタル活用などに関わってまいりました。

コンサルタントとして多様な組織を見てきた経験を生かし、教育や研究だけでなく、大学の経営という面からも本学を支えていければと考えております。女子大学は厳しい時代にあると言われますが、社会から注目される今だからこそ、むしろ新しい価値を示す好機でもあるように思います。

また、地域連携というと地方の話のように聞こえますが、私は、自分たちの暮らす地域の課題に向き合うことこそ大切だと考えています。調布市周辺の地域や企業の皆さまとも積極的につながり、大学と地域がお互いに元気になるような取り組みを広げていきたいです。

AI時代だからこそ、一人ひとりを大切にするカトリックの精神に基づいた指導も大切にしながら、学生の学びに伴走してまいります。どうぞよろしくお願いいたします。



人間総合学部児童文化学科 教授 藤本 恵

驚きを力に

私にとって白百合女子大学は三つめの勤務校です。一つめの大学では初等教育学科の国語教室で、二つめの大学では日本文学文化学科で、児童文学を中心とする日本近現代文学の授業を担当してまいりました。児童文学に専念できることになった白百合女子大学で、驚いたことがあります。それは、児童「文学」を学びたい学生の少なさです。これまで、私のゼミを希望する学生は定員の2倍ほどになるのが普通でした。残念ながら、私の授業力ゆえではなく、「文学」のなかでは、「児童文学」が人気のある研究対象なのだと思います。児童「文化」学科では、「文学」以外の「文化」つまりマンガやアニメ、ゲームなどを学びたい学生のほうが、ずっと多いのですから。私は「国語」や「文学」の外に出て、改めて「文学」の非力を思い知りました。だから文学を捨てるかということ、もちろんそうではありません。白百合女子大学は、児童文学研究の大切な拠点です。文学と現代社会の関係を考え、新しい文化として育てるような活動をしていきたいと思っています。大学教員生活は20年をこえましたが、新たな場所での驚きを力に変えて、新たな気持ちでつとめてまいります。どうぞよろしくお願いいたします。



人間総合学部発達心理学科 准教授 吉沢 伸一

学生たちの未来へ、清新の気を持って臨む

4月より人間総合学部発達心理学科に着任いたしました吉沢伸一です。3月までは児童思春期精神科クリニックの常勤心理職として勤務しておりました。

本学科では公認心理師・臨床心理士の養成を行っていますが、特に白百合女子大学は、歴史的に子どもの臨床に深く力を注いできた伝統があります。これまでの私の臨床経験を、教育の場で少しでも役立てることができれば幸いです。このような歴史ある学び舎に身を置くことを、大変光栄に感じております。

キャンパスでは、目標に向かって一生懸命に励む学生たちから、私自身も心地よい刺激を受けています。一方で、将来の進路や生き方に思い悩む学生たちも少なくありません。大学時代とは、そうした葛藤の中で人生の大事なものを見つけていく、かけがえのない時期であると思います。講義やゼミ、日々の関わりを通して、学生たちの歩みを支えていきたいと考えております。

正門をくぐり、緩やかな坂道を登りながら緑に囲まれた空間を歩いていると、都会の喧噪から離れた、まるで異次元の世界に入り込んだかのような幽玄な雰囲気を感じます。この素晴らしい環境のもとで、学生たちが充実した豊かな時間を過ごせるよう、全力を尽くしてまいります。



人間総合学部児童文化学科 講師 チェ スティーブン

〈子ども〉研究の場を求めて

児童文化学科のチェ・スティーブンです。2024年にアメリカにあるコロンビア大学で博士号を取得し、その後二つのボスドクを経て、今年の4月に白百合に着任いたしました。カナダで初めて大学院に入ったときはぼんやりと日本のことを勉強したいと思っていましたが、児童文学という分野に出会ってからは、日本社会の歴史の中での〈子ども〉（実在と概念両方）の存在と役割に非常に興味を持つようになりました。いまは子どもにまつわる文化を通して近代日本の社会的変動を考察することを大きな研究テーマとしています。

理由ははっきりわからないのですが、私は長年日本に住みたいという願望を抱いてきました。そして、日本の大学につとめるなら白百合女子大学の児童文化学科が理想的だと思っていたところ、このように実現したことにとっても感激しております。教える授業も進める研究も〈子ども〉を中心とすることができ、同じ関心をもつ先生方と働くことができ、豊富な資料にも触れることができる環境は、私にとっては夢のようです。これからどうぞよろしくお願いいたします。



人間総合学部児童文化学科 助教 若谷 苑子

児童文学・文化を専門的に学べる場所で

本年4月より人間総合学部児童文化学科の助教に着任いたしました、若谷苑子と申します。これまで英米児童文学ファンタジーに登場する言葉を話す動物を対象に研究を行ってまいりました。昨年度までは非常勤講師として講義科目を担当し、現在は英語圏の児童文学作品を対象として文学研究の基礎を学ぶ「基礎演習」の科目を担当しております。

私は大学院の修士課程から本学の児童文学専攻に入学し、博士課程（後期）を単位取得退学後、昨年度までは児童文化研究センターで非常勤職員として働いてまいりました。院生のころから考えると、十数年白百合女子大学で過ごしてきたことになります。その間、指導教員の先生をはじめ、たくさんの先生方や職員の皆様にお世話になってまいりました。立場は変わりましたが、児童文学・文化を専門的に学び、研究できるこの場所に身を置くことができ、大変嬉しく感じております。これまでいただいたご恩を少しでもお返しできるよう、そして貢献できるよう努めてまいります。どうぞよろしくお願いいたします。



人間総合学部発達心理学科 助教 根本 泰明

こどもの心の発達を見つめて

2026年度4月より、発達臨床センターに助教として着任いたしました根本泰明と申します。これまで臨床心理士・公認心理師として福祉施設や大学病院、私設心理相談室で臨床に取り組み、同時に本学大学院博士課程を修了いたしました。

私が普段勤務する場所は、6号館「白百合女子大学発達臨床センター」です。本館やチャペルのあるキャンパスからは2,3分離れた場所にある一軒家となります。ここでは、子どもから大人まで日々の困りごとや悩みごとを対象に、心理検査、心理療法、治療教育などが行われています。また本学大学院発達心理学専攻の実習施設に位置付けられており、心理の専門家を目指す大学院生の教育の一翼を担っています。

心理臨床の場において、こどもの心の発達に携わると、実に多くのことを学びます。その子らしく発達していく様子はダイナミックなものであり、常に新しい気づきがあります。大学院生としての生活は多忙なため、その忙しさに流されてしまいそうになるかもしれませんが、心理臨床の妙味を体験できることを願っております。私も教員として、そして本学大学院修了生として、少しでもお役に立てればと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。



研究の原点に立ち返って

カトリック教育センター
教授 釘宮 明美

思いがけず二度目のサバティカルをいただき、関係者の皆様に心から感謝申し上げます。健康上の理由もあって一年間を国内で過ごしました。いかに怠けることなく研究生活を送るかに腐心し、さまざまな講座等を受講して学生時代に戻ったかのような新鮮な日々を送ることができました。

ハイデガー研究者の友人とエディット・シュタインの著『有限的存在と永遠的存在——存在の意味への登攀の試み』の原書講読会を二週に一度行ったり、恩師のバッハ・ゼミや新約聖書原典講読ゼミを今井館で受講したり、放送大学で現象学や幾つかの科目を受講したのも研究を深め知見を広げる上で有意義でした。特に、エディット・シュタイン研究を通じて国内外の研究者、長崎純心大学や国際エディット・シュタイン哲学協会の先生方と研究交流が叶い、12月に4泊5日で長崎を訪れました。また、真生会館での講座担当をきっかけに他大学の院生たちと研究会を開くようになったのも大きな収穫でした。

さらに、日本キリスト教文学会のシンポジウム「ドストエフスキーと漱石」で登壇の機会をいただき、自分の研究の原点に立ち返る機会を与えられました。日本キリスト教詩人会の会員として参加した東北アジア・キリスト者文学会議では、韓国のキリスト教詩人たちと文学的交流を愉oshimしました。これまで書き溜めた小論やエッセイ、書評をまとめて『時のかたみに——キリスト教と文学・師・信仰』という単著を春風社から上梓することができたのも嬉しいことでした。

充填したエネルギーを糧にして、今後の教育と研究に生かしていきたいと思います。



▲ Edith-Stein-Freunde Nagasaki の先生方ほかと長崎にて

パリの書店の片隅に見たフランスの底力

文学部フランス語フランス文学科
准教授 村中 由美子

サバティカル期間中、フランスのパリに2か月滞在しました。受け入れ先のソルボンヌ大学でのセミナーや講演会、また国立の研究・教育機関であるコレージュ・ド・フランスで一般公開されている講座などに参加し、知的刺激に満ちた毎日を過ごしました。その中でもとくに印象に残ったのは、町の書店で開かれている小さな講演会です。

新刊を出したばかりの作家や研究者が招かれ、1時間ほど講演を行った後、参加者との交流やサイン会があります。「小さな」講演会とはいえ、第一線で活躍する著名人が登壇することもあり、私は歴史学者のミシェル・ヴィノック氏の講演会に参加しました。89歳とは思えない豊饒(かくしゃく)としたお姿で、一人ひとりと親しく言葉を交わす様子が印象的でした。

私がパリ・コミューンの活動家であるルイズ・ミシエルの資料を集めているとお話すると、大変喜んでくださり、「日本では、アメリカ以上に私の著書が翻訳されているですよ。何冊訳されていたかな?」とおっしゃり、私がとっさに書名を思い出せずにいると、聴衆のマダムがすかさず、ヴィノック氏の主要著書のタイトルを次々に挙げてくださいました。

一流の知識人と市井の人々との間に自然で活発な知的交流が息づいていることに、フランスという国の底力を感じたひとときでした。このような貴重な機会をいただいたことに、心より感謝申し上げます。



▲ミシェル・ヴィノック氏の講演会にて

英文学研究者としてのインテグリティ

文学部英語英文学科
准教授 米田 ローレンス正和

2017年度に専任教員として着任してから9年目となる2025年度、初めてのサバティカルを経験させていただきました。かつて博士号を取得したイギリスの大学に戻り、研究に専念したこの一年が、私にとってどれほど大切なものであったかは、とても言葉では言い尽くせません。

英文学分野のアカデミック・キャリアにおいて、英語圏の優れた学術出版社からモノグラフ(単著の研究書)を刊行できるかどうかは、研究者としての成否を分かつ分水嶺と言っても過言ではありません。しかし、大規模かつ複雑化したカリキュラムを擁する英語英文学科で、入職と同時に、「講師」の立場でありながら教務委員を務めた私にとって、教育と学務とを両立させながら研究を遂行することは、至難の業でした。「カリキュラムの維持運営を蔑ろにした結果の不利益を直接被るのは、教室の学生と現場の教職員である」と自分に言い聞かせ、学務に動しむ日々。その一方で、このまま研究を疎かにして人生が「失敗」に終わったらどうしようという不安と焦燥が、心身を蝕んでいったこともまた事実です。

幸いにして、このサバティカルを通して、イギリスの大手学術出版社であるラウトレッジ(Routledge)とモノグラフの出版契約を結ぶことができました。私が不在の間、カリキュラムの運営を担っていただいた教員と職員の方々に、心より御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

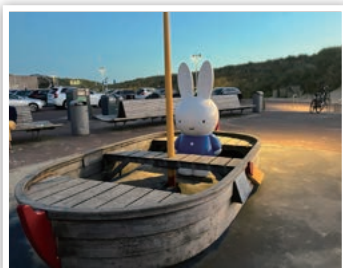


▲ Visiting Research Associate として復帰したブリストル大学の人文学研究棟

オランダで国際箱庭療法学会に参加しました

人間総合学部発達心理学科
教授 波多江 洋介

箱庭療法とは、クライアントに砂の入った木の箱に様々なミニチュアを並べて作品を作ってもらおうという心理療法のやり方の1つです。その箱庭療法の国際学会が2025年8月にオランダのEgmond aan Zeeという町で行われました。ミッフィーの作者がこの町に滞在中にミッフィーのことを思いついたと言われていて、海辺にはミッフィーのモニュメントがありました。さて、学会はといいますと、全参加者が同じホテルに滞在し、朝早くから夜遅くまでワークショップや講義や事例発表会が行われました。同じ「箱庭療法」と言ってもその用いられ方には文化差があり、普段自分が当然と思っていることが当然ではないと気付くことができます。面白かったのが、「オランダとはどのような国なのか？」ということに関する講義があったことです（オランダは干拓地が占める部分が多く、「世界は神が作ったが、オランダはオランダ人が作った」ということわざがあるそうです）。心理学とは何の関係もない講義で、最初は、「なんでこんな講義があるのだろう？」と疑問に思いながら聞いていました。でも、聞き終わってみると自分が立っている土地を理解することによって、自分が少し安定して立っているように感じられ、不思議な感覚でした。サバティカル全体について考えてみると、自分の知らなかった理論について学び、知らなかった国を訪れ、やってみたことのないことを体験し、そうした経験の中から自分の現在地を改めて確認することができた1年間だったように感じています。



人とつながり、考えた「ポストSDGs時代の教育」

人間総合学部初等教育学科
教授 大貫 麻美

SDGs達成目標年限の2030年まであと数年となり、「ポストSDGs時代の教育」の在り方が問われるようになっていきます。特別研修の助成を受けた在外研修期間には、2022年に改訂されたオーストラリアン・カリキュラム version 9.0 に関する研究や、ケアンズ在住邦人子女を対象とした教育の実地調査を行いました。

科研費や「乳の学術連合」学術研究の助成を受けた研究も継続して行い、ウェルビーイングの実現、サイエンス・アイデンティティの涵養等の観点から、ポストSDGs時代の教育の在り方を検討しました。開発した科学教育プログラムについて国内外で実地調査を行う過程では、現地の野生動物や貴重な自然事象を見る機会にも恵まれました。国際学会 iSTEM-ed2025 で、初等教育学科の椎橋げんき先生、石沢順子先生との共同研究発表が表彰されたことも嬉しい思い出です。

加えて、初等教育学科卒業生の結婚式参列などを通して、卒業生の幸せな姿や活躍の様子を拝見したり、学内の教職員の皆様との協議に参加したりする中で、本学の教育成果や未来に思いを馳せる機会も多くありました。

旧知の方や新たにご縁をいただいた方、さまざまなお立場の方々とのつながりに支えられ、大変充実した研修期間を過ごせましたことをありがたく思っています。サバティカルの機会をいただきましたことに心より感謝申し上げます。



▲ Best Paper Award in Pedagogical Models and Applications of STEM education, iSTEM-ed 2025 の表彰写真

没後10年記念トークイベント

「いま、津島佑子を読む」が開催されました

2月27日（金）、図書館にて今年没後10年を迎える作家・津島佑子さんを偲ぶためのトークイベント「いま、津島佑子を読む」（国語国文学科主催）が開催されました。

津島佑子さんは、本学文学部英文学科に在学中から小説を執筆。卒業後、1978年に『寵児』で女流文学賞、翌年『光の領分』で野間文芸新人賞を受賞。1998年に谷崎潤一郎賞、野間文芸賞を獲得した『火の山—山猿記』はNHK連続テレビ小説「純情きらり」（2006年放送 主演：宮崎あおい）の原案ともなりました。2005年には『ナラ・レポート』で芸術選奨文部科学大臣賞、紫式部文学賞を受賞。長く文壇で活躍されましたが、2016年2月、惜しまれつつその生涯を閉じられました。

イベントでは、齋藤花琳氏（ライフ・リテラシー／情報教育センター職員）が『寵児』について、井上隆史 教授（国語国文学科・学科長）が『ジャッカ・ドフニ』についてレポートしたほか、津島さんの本学在学時代の同人誌や文化祭資料、『ジャッカ・ドフニ』創作メモ（山梨県立文学館提供）などの展示物を閲覧しながら参加者同士のフリートークが行われ、津島さんを偲ぶかけがえのない時間が共有されました。



調布市文化・コミュニティ振興財団との 相互協力提携協定締結

3月3日付で、調布市文化・コミュニティ振興財団と本学は地域に向けた新しい学びと体験の創出を目指して相互協力提携に関する協定を締結しました。

4月24日には財団の榑正剛理事長と猪狩友一学長による協定締結の調印が行われ、長友貴樹調布市長を表敬訪問しました。

今後は同じ仙川地域に拠点を置く同財団が管理運営する調布市せんがわ劇場の地域文化拠点と、本学の言葉や文化から人間の本質を探る文学部、および人への理解と支援を目指す人間総合学部の研究成果を相互に活かし協力し合う画期的な活動が始まります。

活動の一例として、これまでも子育て支援ルーム「りすぶらん・あんふあん」が実施されています。乳幼児とその親を対象に子どもの発達や親子のコミュニケーションについて実践的に学ぶ機会を提供するものです。演劇教育技法によるワークショップを実施することにより、学生ならびに乳幼児とその親に豊かな体験の機会を提供し、地域に開かれた学びと交流の場を創出しています。また財団による生涯学習講座の一環として、せんがわ劇場を会場に、本学教員による講座を実施し、専門的な知見に触れながら、舞台芸術の理解を一層深める機会も提供される予定です。

相互協定による様々な事業展開により、ひとびとの交流が進み地域に貢献することがますます期待されます。



【報告】「フランス語フランス文学科」「プチテコ・プランタン」 地域の小学生がフランス語の学びを体験！

2月28日(土)・3月1日(日)の2日間、本学フランス語教育研究会主催の小学生フランス語教室「プチテコ・プランタン」が開催され、今回は20人の小学生が参加。フランス語フランス文学科の学生や大学院生がスタッフとなり、「フランスのおやつ」をテーマにした多彩なプログラムを企画しました。1日目は、習った表現を使ってネイティブスタッフからおやつシールの集めるゲーム「おやつパーティーをしよう」に挑戦。子どもたちは緊張しながらも楽しそうにやりとりを交わしていました。2日目は保護者を迎えて「プチ発表会」を開催。



オンライン教室のメンバーによるプチ・スピーチやフランス語の歌のほか、大学院生がシナリオを作成した劇「おかしないえ」の紙芝居動画を上演しました。素晴らしい出来栄に、会場からは温かい拍手が送られました。

2000年から続いている白百合の小学生フランス語教室「プチテコ」は、これからも地域の小学生たちに楽しい外国語学習体験の場を提供していきます。

2日間の様子はJ:COMの「ジモトボックス」でも紹介されました。



子育て支援ルーム【りすぶらん・あんふぁん】

「りすぶらん・あんふぁん」は、子どもの健やかな成長について、発達心理学や幼児教育や児童文化を学ぶ、白百合の学生や教員たちと一緒に楽しく考える「子育て支援ルーム」です。フランスのカトリック修道女会を設立母体とした本学の「子育て支援」に対する思いを、フランス語の「りすぶらん(lys blanc):白百合」と「あんふぁん(enfants):こどもたち」とで表現しています。

クリスマスを楽しもう

家にある身近な物で、きれいな音の出る楽器をつくります。クリスマスの音楽に併せて楽器を鳴らしながら、親子で一緒に楽しい時間を過ごしましょう♪

担当	眞榮城 和美(本学 人間総合学部 発達心理学科教授) 春日 文(大妻女子大学講師) 発達心理学会の学生たち
日時	2026年12月9日(水) 10:30～11:45
会場	白百合女子大学3号館1階プレイルーム
対象	0～3歳の乳幼児とその保護者
定員	8組



お申込み



調布国際音楽祭 2026「鈴木優人オルガンリサイタル」が
本学チャペルにて開催されました

「調布国際音楽祭」「Chofu International Music Festival」は、調布のまちを舞台に毎年初夏に行われているクラシックを中心とした音楽祭です。(主催:公益財団法人調布市文化・コミュニティ振興財団、調布市)第14回を迎える今年の会期は2026年6月20日から28日まで、「おいしい音楽、めしあがれ。」をテーマに多彩なプログラムが調布の街に展開されました。

本学では、5月31日(日)調布国際音楽祭2026のプレ・イベント「鈴木優人オルガンリサイタル」に、会場協力することになり、「調布国際音楽祭」のエグゼクティブ・プロデューサーを務める鈴木優人氏による、J.S. バッハ「最愛なるイエスよ、我らここに集いて BWV 731」ほか 本学チャペルのパイプオルガンの演奏が行われました。



2026年度『公開講座』『宗教講座—創造への道』開講のご案内

2026年度も『公開講座』『宗教講座—創造への道』を開講しております。みなさまのご参加を心よりお待ちしております。

お申込み

公開講座



宗教講座



映画『ほどなく、お別れです』(浜辺美波×目黒 蓮 W 主演)
で本学キャンパスが撮影に使用されました

三木孝浩監督映画『ほどなく、お別れです』(制作プロダクション:TOHO スタジオ、配給:東宝)の一部シーンの撮影に本学でも協力しました。

本作品は、長月天音作「ほどなく、お別れです」シリーズ(小学館文庫刊)を原作とし、浜辺美波さん、目黒蓮さんのW主演により撮影され、本学での撮影は2025年2月中旬に行われました。

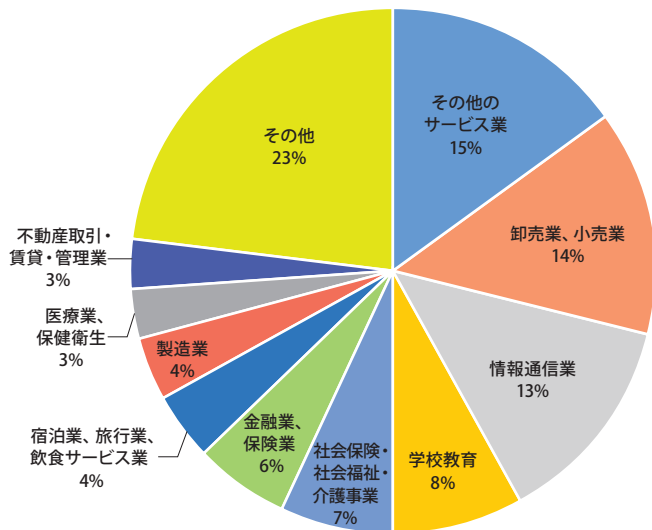
キャリア・その他

・・・2025年度（2025年9月、2026年3月）卒業生の就職状況とキャリア支援・・・

2025年度卒業生の就職率については、下記の結果となりました。

学部全体	国文	フ文	英文	児文	発達	初等
99%	100%	100%	100%	98%	94%	100%

就職先の業界別割合については以下の通りです。（学部全体）



就職先の特徴として、幅広い業種・業界にバランス良く決定していることが挙げられます。具体的な企業名は、カルビー株式会社、株式会社 TASAKI、株式会社みずほフィナンシャルグループ、株式会社ミロク情報サービス、株式会社 ANA Cargo、クリナップ株式会社、株式会社帝国ホテルなどです。

キャリア支援課では、年間2回の就職総合ガイダンスを全学年対象とし、1、2年次からでも卒業後を意識した学生生活が送れるよう早期からのキャリア支援を行っています。また業界を代表する企業や白百合のOGが多数活躍している企業をお招きし、担当者による説明会も実施しています。ぜひご活用ください。

【開催報告】ANA総合研究所と連携した「エアラインフォーラム」

3月20日（金）、クララホールにて「エアラインフォーラム」が開催されました。本学では、ホスピタリティ・マネジメントプログラムの一環として、株式会社 ANA 総合研究所と連携し、理論と実践の往還を重視した教育を展開しており、授業科目の充実に加え、正課外においても多様な学びの機会を提供しています。本フォーラムでは、航空業界におけるホスピタリティを主題とし、全国から航空業界を志す高校生や在学が参加、オンラインを含め約100名が集いました。会場は、将来を見据えた真摯な学びの場として、落ち着いた熱気に包まれました。

■「航空業界の最前線から学ぶホスピタリティの本質」第一部では、株式会社 ANA 総合研究所の主席研究員であり、本学で講師も務める恒川久美氏が登壇。「観察すること」「感じること」「その理由を分析すること」の重要性が示され、この積み重ねが次世代のホスピタリティにつながるという、最前線の視点に基づいた具体的な講義が行われました。

■「多面的なキャリア理解と、現役卒業生による座談会」第二部では、ANA エアポートサービス株式会社の人事部から佐久間琴美氏を迎え、採用に関する講話が実施されました。客室乗務員やグラウンドスタッフ（GS）にとどまらない多様な職種やキャリアパス、具体的な働き方が提示され、学生たちにとって進路選択の視野を広げる有益な機会となりました。

フォーラムの締めくくりには、本学のフランス語フランス文学科を卒業した現役のCAとGSによる座談会を開催。現場での経験に裏打ちされた具体的なエピソードは、参加者が自身の将来像をリアルに描く契機となりました。



ご支援のお願い（寄付方法が新しくなりました）

2026年度より、多くのみなさまにご支援いただけますよう、クレジットカードでの決済やコンビニエンスストアでのお支払いが可能となりました。

寄付金募集要項

目的 本学の教育研究環境の整備拡充・奨学金にあてることを目的とします。

目 的 2026年5月～2027年3月

募 金 金 額 一口1万円 ※恐縮ですが、複数口ご協力いただけますと幸いです。

募 集 対 象 在学生、保護者、卒業生、教職員、一般、企業

募金申込方法 大学が寄付の決済代行を委託している株式会社エフレジ「F-REGI 寄付支払い」のサイトにアクセスしてお手続きをお願いします。

お申込み・詳細

